
CAGE - 籠の中の記憶探偵 - 《事件編》

白城海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CAGE - 籠の中の記憶探偵 - 《事件編》

【Nコード】

N5490Z

【作者名】

白城海

【あらすじ】

「人が 死んでる？」

ある日学校で死体を発見してしまう主人公、天海慶次。震える彼に向かい、幼馴染の風間祈衣は宣言する。

「高校生探偵の出番ね！」

そう言いながら携帯電話を取り出し通報する祈衣。

「通報かよ！？探偵はどこに行った！探偵はッッ！」

自称高校生探偵の幼馴染。主人公にベタボレの中二病の後輩。毒を吐くけど兄思いの妹。変態でブラコンの兄。

そんな奴らとのドタバタの日常に紛れ込んできた《非日常》

一体、学校で何が起きたと言うのか。

そして突然狙われる彼の命。必死に訴えても話を聞いてくれない警察、大人たち。

激しさを増す襲撃。ついに、大切な友人までもが巻き込まれ、傷つく。

血に染まった後輩を思い、彼は決意する。

「犯人をこの手で捕まえる」と。

記憶障害の青年と、一癖も二癖もあるヒロイン達の、《見えない犯人》に立ち向かう学園バトル・ミステリ。開幕！

…推理なんて無いよ？

プレ中編、学園コメディの《日常編》 <http://ncode.syosetu.com/n9023y/>

プロローグ 〈二週間前〉

「六月四日。十六時三十分。私立平坂高校 音楽室」

唐突だが聞いてほしい。

《音楽室の扉を開けたら、人が死んでいた》。

目の前の出来事に俺 天海慶次は心の奥底から恐怖し、絶句していた。

六月初旬とは思えないほどの暑さ。

吐きそうなほどの熱気。

体中に張り付く湿気。

体の至る所から汗が噴き出すのを感じる。

暑さからの汗では無い。

氷のように冷たい汗 恐怖からの、汗。

手が、震えていた。

寒気が全身を覆っていた。

あのとときの俺は、自分でも笑ってしまうくらいのパニックに陥っていた。

「夢、だ。夢を見てるんだよ。俺は」

ゆっくりと目を閉じ、そして開く。

見慣れた音楽室に、一つだけ異様なものが《垂れ下がっていた》。目に映るのは天井から延びたロープ。そしてだらしなく垂れ下が

った男の四肢。

もちろん足は宙に浮いている。

首の骨が折れているのだろうか。死体は奇妙な角度で首を垂れ、上目づかいとも言えるような顔を俺の方に向けていた。

コイツは夢じゃない。間違いなく現実だ。

「は…は」

現実から逃れようと乾いた笑いが口から洩れた。

だがそんな笑いは死体と目が合った瞬間に止まってしまっ

今にも眼窩^{がんか}からはみ出しそうに飛び出た、それでいて暗く光の無い瞳。

その瞳が俺をじっと見つめているかのように見えた。

足が、動かない。

首が、動かない。

このまま死体に魂を引きずられ俺も死んでしまうのではないだろうか。

混乱が妄想を呼び、妄想が錯乱を引き出し、意識が遠くなる。

その時だった。

「どうしたの、ケージ？」

聞きなれた女の声が引き金となり、ようやく俺の体が硬直から解き放たれた。

ただし抜け出せたのは首だけ。

後ろを振り返ると見慣れた女の顔。

《風間祈衣》だ。

小顔で化粧気が薄く、色白で整った顔立ち。快活さを象徴するかのようにぴんと外側に跳ねたミディアムロングの癖っ毛。猫を思わせるやや釣り上った大きな瞳。

その瞳が俺の顔をじっと覗き込んでいた。

「人が……死んでるんだよ」

教室の死体を指差し、伝える。手が震えているのが自分でも分かった。

俺が指を向けた方向を風間が見る。一瞬、目を見開き絶句。常識的な反応だ。

だが、彼女が続けた言葉は常識的とは正反対のものだった。

「困ったわね。このままじゃ練習できないわ」

「そう言う問題か!？」

思わず叫ぶ。変わり者だと言う事には気付いていたがここまでとは思わなかった。

「文化祭まで後3カ月。部員もわずか3人なのはどうしょっか……」

「いや、どうしょっか……じゃねえだろっ!」

「しかも、もう一人の部員なんてまだ来てないし……」

「まあ、黒川^{クロカワ}は遅刻常習犯だからな。ってそうじゃない!死体だよ!死体!」

2学年下の後輩の顔が一瞬、目に浮かぶ。だがそんな事は今はど

うでもいい。

問題は俺達の目の前に死体がある、と云うことだ。

「冗談冗談。分かってるわよ。高校生探偵の出番って言いたいんでしょ？」

叫ぶ俺に対し、風間が現実離れた奇妙な発言をした。

高校生探偵。

風間祈衣と言う女はミス터리やサスペンスものが大好きで、ことあることに探偵を自称している。

事実、校内の出来事に限って言えば定期テストの順位から同級生の三角関係の内部事情まで完璧に把握しているらしい。俺に言わせれば探偵と言うよりはワイドショーだが。

「あたしのカンが言ってるの。この事件は殺人の可能性があるって」

とんでもない発言だった。

それも真顔で、真剣に。俺の瞳を真っ直ぐに見据えて。

風間は思いつきをそのままノリと勢いで口に出す女だが、今回はかりは冗談ではなさそうだった。

「可能性って事は、自殺じゃないかもって事か？」

「そう、これは音楽部創立以来の天才ボーカリストであり、高校生探偵であるあたしの出番に違いないわ。推理漫画の王道よ」

首吊り死体を指差し、風間が嬉しそうに声を弾ませる。死ねばいいのこ。

「はあ、仕方ないな。期待してやるよ。お前の実力って奴に」

「任せて！あたしの歌で世界を変えてみせるわ！アタシの歌を聞けえっ！」

「そっちは欠片も期待して無えよバカ！探偵の方だ、探偵の方！」

思い付きをそのまま口に出したただけだった。コイツは俺の想像を裏切る事が趣味なのか。

「仕方ないわねー。じゃあ、まずさしあたってする事、それは」

風間がおもむろにポケットから携帯電話を取り出し、キーを操作する。現場を画像に残すつもりなのだろうか。

慎重な操作。そばで見ている俺にでさえ緊張感が伝わってくる。

一体何をすると言うのだ。

長いようで短い時間。

俺の視線を気にしてかせずか、風間はおもむろに携帯電話を耳にあてた。

「あ、もしもし。警察ですか？高校に死体があるんですけど…はい、場所は」

「通報かよ！？高校生探偵はどこに行った！常識すぎて予想外だよチクシヨウ！」

「市民の義務じゃない。何を言ってるの？」

「探偵だったら推理しろ！」

「警察に任せた方が確実だし？通報は趣味みたいなものだし」

「ウサ美ちゃんかお前は！！」

名探偵じゃなかったのかお前は！？

「別に推理しなくても死ぬわけでもないし」

「いつそ死ねよ」

「それに、電話中なんだから邪魔しないでよ。警察の人困ってるじゃない」

「俺のせいか！？俺のせいなのか！？」

理不尽だ。あまりにも理不尽だ。

「……ったく。いつもいつもバカみたいなことばかり言いやがって。少しは俺のストレスを」

「でもさ」

ぶつぶつと呟く俺の愚痴を、通報を終えた風間が遮った。

「震え、止まったわよね？」

にこり、と俺を瞳を覗きこみ微笑む風間。

そう、彼女の言った通り、いつの間にか俺の体の震えは収まっていた。

後から思えば、彼女なりに俺をリラックスさせようとしたのだろう。

「はあ」と嘆息し諸手を挙げての降参する俺。

「あとは警察がやってくれるんだ。探偵ごっこなんて危ないマネだけは止めてくれよ？」

「そればかりは保障できないわね」

「そこは保証しろよ。馬鹿か？馬鹿なのかお前は！とにかく、お前は大人しくしてろよ。絶対だからな？全部、警察に任すんだ」

風間を睨みつけ釘を押す。

気の早い蝉の鳴き声に交じって、パトカーのサイレンが近づいてくるのを感じた。

事実、この事件は警察があつという間に解決した。

科学捜査が、《足》で稼いだ証言が、日本警察に積み上げられた《技術》の結晶がわずか三日で犯人を逮捕したのだ。

そこには見た目が子供で頭脳は大人の少年も、名探偵の孫も、戯言使いも、ついでに自称高校生探偵も、何も入り込む余地なんて無かった。

学校で起きた死体騒ぎにマスコミは注目し、連日大騒ぎを巻き起こしていたが、一週間もすれば沈静化した。

何も恐れる事はない。現実なんてそんなものだ。

少し窮屈で、退屈な事に我慢すれば、安心で、安全な毎日を送れる。

《そう思い込んでいた》。

あのときの俺は知らなかったのだ。

《平凡な日常》がどれほどかけがえのない物なのかと言う事を。

ふとしたきっかけで、どれだけ簡単に失われてしまう物なのかと言う事を。

回りくどい言い回しは止めによつ。
端的に言つ。

事件から二週間後

《俺は、命を狙われる》

プ
ロ
ロ
ー
グ
終

プロローグ へ二週間前（後書き）

こちらは籠の中の記憶探偵《日常編》と同じ世界観、同じ時期、同じキャラクターを使用した《学園ミステリもどき》となっています。

学園コメディの《日常編》は、よりキャラクターやプロローグの死体発見の事件について詳しく愉快に描かれています。が、そちらを読まなくても独立した長編小説として楽しめるように作っています。

分量は厚めの文庫本一冊程度を予定していますので、良ければどうぞ最後までお付き合いください。

1・日常の終わり

ふわり、と。宙に舞う感触がした。

「えっ？」

午後六時半。ラッシュを迎えた駅のホーム。
俺はそこにいた。いたはずだった。

なのに、どうして

どうして、俺は宙に浮いているのだ。

どうして、目の前に電車が迫って来ているのだ。

俺の瞳に映るのは、鋼鉄はがねの処刑具。

いや、処刑具なんて生易しいものではない。

眩いライト。

がたがたと車輪とレールの擦れる音。

高速で襲い来る巨大な鉄塊。

電車。

数秒も待たずに俺は地面へと落ちるだろう。

そして、次の瞬間に五体は寸断され、臓器と脳漿を飛び散らし、
物言わぬ肉塊になるに違いない。

死ぬ。俺が、死ぬ。

視界が灰色へと変わる。

世界がスローモーションに見える。

今まで生きてきた中の《記憶》がフラッシュバックする。

穏やかだった幼い頃。
優しい兄、甘えん坊の妹。
多忙ながらも愛情を注いでくれた両親。

突然終わった穏やかな日々。

鼻をつく消毒液の香り。白い部屋。ベッド。病室。
交通事故に遭ったと聞かされた事。

《記憶障害》を負ってしまった事。

もう、二度と穏やかな日々は戻って来ない事。

穏やかな日々は終わってしまったが、騒がしい日常が始まる。
《障害》を負ってもなお付き合いを続けてくれる気のいい友人。変
わり者の後輩。

学校へ行き、他愛のない話をし、笑い、楽器を演奏する日々。

そして今、全てが終わりを迎えようとしている。

どうして、俺だけ。どうして、俺ばかり。

神様とやらがいるなら心の底から憎悪をぶつけてやりたい。

ゆっくりとゆっくりと進んでいく世界の中、俺の胸にはただ、怒
りが燃えていた。

.....

《見えない敵と命の危機》

六月十八日 午後零時四十分（六時間前）
私立平坂高校 中庭

「甘いわね慶次！探偵から逃げられると思ったの？」

昼休みの中庭に、やたらと良く通る声が響いた。

俺は驚かない。もう慣れた。

こんな事を言う生徒は一人しかない。

食べかけのパンを無理矢理牛乳で流し込み、声の方を見る。

視線を向けた先には、予想通りの女。

中肉中背。化粧気の無い顔立ち。猫を思わせる特徴的な瞳。外側に跳ねたセミロングの黒髪。

人前では認めたくない友人、風間祈衣だ。

思わずため息が漏れる。

「うるさい。エセ探偵。俺の孤独のグルメを邪魔するな。放っておいてくれ」

風間は探偵を自称する変人だ。

事実、学校内の話題に関しては探偵の名に恥じない程の情報収集能力を持っている。

俺から言わせてもらえば探偵と言うよりはゴシップ記事かワイドショーのようなものだが。

ちなみに、一応幼馴染らしい。正直、認めたくない。

「グルメって…コンビニのコロッケパンじゃない。栄養偏るわよ？」
「そうだよ。天海先輩。よければ僕がお弁当を作るけど？」

突然聞こえた後ろからの声。

振り向くとこちらも見慣れた顔。

ぶかつ
音楽部の後輩、黒川^{くろかわあやは}絢葉。

俺に一目惚れしたと言い、突然入部した妙な少女だ。

小柄で色白。眼鏡の下に輝く、硝子のように透き通ったブラウンの瞳。光の加減によってはアッシュブロンドにさえ見えてしまうほどに繊維の細い髪の毛。まるで職人の魂が込められたフランス人形のような少女。

黙っていれば目を見張る美少女なのだが、性格に大きく問題があるのが難点。

具体的に何が問題かと言えば、《付き纏ってくる》。《気づけば俺の背後にいる》。

まるでストーカーか忍者。

悪意も被害もないのが逆にタチが悪いと言える。

「…つたく」

静かな昼食を邪魔した友人たちに向かい、頭を抱え、文句を言う。

「メシくらい静かに食わせてくれよ。あと、黒川^{クロ}。お前はせめて食えるモノを作ってから弁当って単語を発しろ。頼むから」

「それはまるで、僕が料理が出来ないみたいじゃないか」

「事実だろ。この前持ってきた、《調理実習で作ったクッキー》がただの炭だった事、忘れてないだろうな」

「ううっ」

急所を突かれ、黒川が黙る。

その姿を見て嘆息する俺。今日は一人になりたくて隠れていたのに台無しだった。

そもそも、どうやって俺を探し当てたと言うのだろう。

俺達の通う平坂高校は、生徒数三千人の大型校。人間一人探すのも簡単ではないはずだ。

「ったく。ストーカーかお前らは」

「これが探偵の力よ」

黙れ自称探偵。俺はお前を探偵と認めない。

世界中の誰もがお前を探偵と認めようと俺だけは認めるものか。

「違うよ。先輩たちは探偵じゃなくて、秘められた《能力》チカラに覚醒する《決意の騎士》なんだから」

そして黒川は高校生なんだから、中二病は卒業しなさい。どこの邪鬼眼使いだ。お前は。

「ってか、何の用だよ」

これ以上こいつらのノリに付き合っているのは昼休みが終わってしまふ。

無駄話を切り上げ、話を聞く事にする。

「いや、特に用は無いんだけど」

「天海先輩ウオツチング？」

無いのかよ。そしてウオツチングって何だ。俺は鳥か獣か何かか？何なんだよお前ら。

「だったら一人にしてくれ」

迷惑な友人たちとの騒がしいやり取り。これが俺の日常。

いつもなら馬鹿騒ぎに加わっている所だが、今日は勝手が違った。

昨日の夜からの出来事を思い返すと、とてもじゃないが笑う気分にはなれない。

あまりにも《色々と起きすぎている》のだ。

「悪い。ちょっと疲れてるんだよ」

「疲れてるから来たのよ。その顔、何かあったでしょ？」

「僕たちに隠し事は無駄だよ、先輩」

「うっ…」

今度は、俺が黙る番。

変人だが、鋭い。どうやら心配させてしまっていたようだ。妙に気恥ずかしい気持ちになってしまう。

「一人で抱え込んで仕方がないじゃない。一体どうしたの」「どうしたって言われても、俺にも分からないんだよ」

観念して、《色々と起きすぎている》事を語る事にする。

恐らく、黙っていれば余計に不安にさせるだけだ。

お人好しの友人たちは、俺が何も言わずに抱え込んでいれば自分で動き出すことだろう。

例え、それが原因でトラブルに巻き込まれると分かっていたとしても、だ。

本当に、昨夜から訳の分からない事ばかりだった。

昨夜、俺は強盗に襲われた。

コンビニへ行く途中、人気のない河川敷で覆面をした複数人の男に囲まれ、刃物で脅されたのだ。

幸い、上手く逃げる事に成功し怪我もなく金品も奪われなかったのだが

「じゃあ良かったじゃない。怪我が無いなら何よりよ」

「先輩は警察に行ったの？」

「行ったけど、『パトロールを強化します』で終わりだった。どうも、被害が無いと警察ってのは動かないらしい」

「そうね。数日、警戒の強化は続くかもだけど、いるかないか分からない強盗に人員は回せないもん」

風間の言う通りだ。強盗未遂より解決しなければいけない事件は世の中に山ほどある。

誰も傷つける事ができず、何も奪う事が出来なかった間抜けな強

盗の為に割く労力は多くはないだろう。

「だろうな。俺だってそう思う。登校中は警官が多かったし、俺も不満はないさ。だけど」

それだけではなかったのだ。

強盗たちを撒き、警察に通報し、交番で聴取。

疲れきって帰宅する途中に、《それ》はやってきた。

住宅街の狭い路地。

突然、目を焼くヘッドライト。

一方通行を猛スピードで逆走するバイク。

いたずらなのか、殺意があったのか、それともただの暴走車なのかは分からない。

ただ一つ確実なのは、避けることができなったら死んでいた事。一瞬でも飛ぶのが遅れていたら、俺はここに立っていないと言う事。

「それ、本当？」

信じられない、と言った表情の風間。

目を見開き、手を口に当てている。

「嘘を言っただろうするんだよ。マジで死ぬかと思ったんだ」

思い出すだけで体が震えそうになる。

凶暴なエンジン音、タイヤが地面を擦る音、獲物を狙う獣の瞳のようなヘッドライト。

闇の中のため犯人の顔も見えず、ナンバープレートも確認する前に逃げられてしまった。

「これは事件の予感ね。今度こそあたしの…高校生探偵の出番よっ。二週間前の《死体遺棄事件》のリベンジよっ！」

「僕も手伝うよ。天海先輩を傷つけるなんて、ゆるせない。僕の黒魔法で呪ってやるんだから」

「茶化すなよ。そもそも事件って決まった訳じゃないだろ」

「何故か抱きついてきた黒川の腕を振りほどきながら諭す。

そもそも、俺の命が狙われる理由が無い。

殺されるような恨みを買った記憶はないし、金を持つてる訳でも無い。

何かとてつもない秘密を知っている訳でも無ければ、隠された《能力》なんて馬鹿馬鹿しい物も存在しない。

命を狙われていると考えるくらいなら、宝くじが当たるくらいの確率を引いたと考える方がまだ自然だった。

「本当にそう思ってる？」

俺の心の中を見透かしたかのように風間が問いかける。

彼女は顔を上げ、俺の目をじっと見据えていた。

「風間先輩の言う通りだよ。天海先輩の《記憶障害》なら、知らない間に命を狙われていてもおかしくないんだから」

《記憶障害》。交通事故で負ってしまった頭の傷があった場所をさす。

俺は去年の秋、風間をかばって交通事故に遭ったらしい。

らしい、と言うのは頭を強く打ったせいで当時の事を全く覚えていないからだ。

既に表面上の傷は完全に消えているが、俺の《頭の中》には消えない《障害》が残っている。

日常生活を送る事に不便はあるが、どうしようもないと言っほどではないのが救いかもしれない。

それに、例え障害が残っていても、この迷惑な友人たちと送る騒がしい日常があれば不満はない。心からそう思う。
…とてもじゃないが面と向かって本人たちには言えないが。

「とにかく一回、ちゃんと調べてみようよ。何かわかるかもしれない」

黒川が言葉を言い終える事は出来なかった。

「っ！」

影がかすめた。

直後、何かが割れる音。

日常が赤く染まった。

手にしていた牛乳パックを取り落してしまっっほどの衝撃。
信じられない光景。

俺達はたった今、中庭でお喋りをしていただけの筈だ。

ほんの数秒前まで、黒川は俺に抱きついて笑顔を見せていた筈だ。
なのに、何故。

《何故黒川は血まみれになって蹲っているんだ》。

《何故俺の制服は黒川の血で赤く染まっているんだ》。

俺の足元には砕けた硝子製の植木鉢。

周囲に散らばるのは、砕け、飛び散った硝子片。

そして、植えられていたガーベラの花。

赤い花弁が鮮血で上塗りされ、赤黒い輝きを放っている。

数秒前を思い返す。

俺の鼻先をかすめていった影。

一瞬の風圧。

そして、ガラスが碎ける音。
間違いない。

《この植木鉢は上から降ってきた》

「誰だッ!!」

上を向き叫ぶ。

だが

俺の叫びに答える者は、何処にもいない。

耳に入るのは、騒ぎを聞きつけて集まった野次馬が放つ雑音。
そして、黒川絢葉の痛みに呻く悲痛な声だけだった。

1・日常の終わり（後書き）

事件編、開始。

初見の方でもわかるように書いていくつもり。

コンゴトモヨロシク

2・走馬灯 現実

頭が真っ白になったのは一瞬だけだった。

呆然としてる場合か。

違うだろう。

頭の芯から、俺の心の一番奥から、俺が俺である為の部分に嘔吐。目の前で大切な友人が蹲っている。血を流している。苦痛の呻きを上げている。

ならば、俺がする事は一つしか無いじゃないか、と。

「風間。救急車だっ」

「…う、うん！」

立ち尽くす風間の背中を叩き、指示を出す。

血なら嫌と言うほど見慣れている。ほとんどは俺が巻き込まれたケンカによるものだが。

そして、俺の兄は大学病院で医師の仕事をしている。

幸運な事に、俺は兄から応急処置の知識も教わっていた。

大丈夫。俺なら できる。

風間が携帯電話を取り出すのを確認し、黒川の傷の具合を見る。

左肘の内側。大きな血管が通る場所が、横にぱっくりと裂けていた。傷口からはどくどくと止めどなく血液が流れ出ている。これほどの出血は今までに見た事が無かった。

「だけど、大丈夫だ。このくらいなら」

自分の腰のベルトに手を伸ばし、外す。

運がいい事に、今日は皮では無く布ベルト。布ならば《きつく縛

る事が出来る》。

人間は体重の一割の血液を失えば体調に支障をきたし、三割で生命の危機に陥ると言う。

本当に危険な出血は、心臓の鼓動に合わせて噴水のように噴出す出血だ。

黒川の怪我はそこまで深刻ではない。もちろん放置すれば危険には違いないが。

服に血がつくことなど気にせず、ベルトで左の二の腕を縛る。間接圧迫止血。左腕に行く血液の量を減らし、出血を抑える。

後は傷口を覆う事が出来ればいいのだが…。

周囲を見渡す。

生憎、知り合いの顔は無い。当然だ。俺はダブリの三年。

しかも《事故》のせいで人付き合いを極力控えているのだから。

目に入るのは遠巻きに見ている興味本位の野次馬ばかり。役に立つとは思えない。

俺自身の無力さに歯噛みする。だが

「に、兄さん。どうしたんですか!？」

偶然だった。

妹 天海美鳥^{みづし}が近づいてくる。

目を見開き、驚いた表情。長い黒髪を揺らす姿は怯える小動物のようだ。

「ちようどいい。清潔なタオルを持ってないか？」

確か、美鳥の午後の授業は水泳。妹なら持っている可能性があると思ひ、問うが

「すみません。タオル…教室です」

「…だよな」

当然の答え。常に鞆を持ち歩いている訳が無い。当たり前的事に考えが及ばない。動揺している。

「クソツ！おいつ、誰かタオルは持ってないかつ！清潔な奴だつ

！」
野次馬に向け、叫ぶ。祈りを、願いを、思いを込めた叫び。
だが、野次馬はお互いの目を合わせるだけで答えは返ってこない。
ふざけている。どうかしている。

「返事くらいしろよっ！女の子が血まみれなんだぞ！？」
先ほどまでの溢れるような出血ではないが、黒川の腕からは未だ
にじくじくと血が流れている。

ただでさえ白い顔は、病的なまでに青白く染まり瞳は涙で潤んで
いる。

「何でだよ……。どうして無関係でいられるんだよ！」

怪我人の前で苛立ちを見せる事は良くない事だと聞いてはいたが、
俺にはどうしても感情を抑える事が出来なかった。

このまま保健室に連れていくか？と自問。

答えは、NO。保健室まで百数十メートル。

血を垂れ流す黒川を歩かせたくはない。

動けば血管の活動が活発になり、出血が増える。

それでも、このまま放置するわけにはいかない。

「クソつたれ！クロ、ちょっと待ってる。すぐにタオル取ってくる
から！」

黒川は無傷の右手で俺の制服のベストを力なく掴んでいる。

不安なのだろう、痛みが。恐ろしいのだろう、生まれて初めての
出血量が。

制服を掴む手を優しく引きはがし、立ちあがったその瞬間、

「どけっ！有象無象の役立たずども」

凜とした女の声が校舎の隙間に響き渡った。

気高く鳴り響く声は、まるで夜闇を切り裂く稲妻。

独善的と言えるほどに強く、逆らう事を許さないほどに鋭い。

声に込められた感情は《怒り》。他人に無関心な野次馬に、見て

いるだけの役立たず達に向けられた怒りだ。

声の出所は後ろから。

振り返っている場合では無い。そんな暇はない。なのに、俺は見てしまった。

《彼女》の声に宿る余りの強さに、怒りに引き寄せられるように。

「!」

野次馬の壁が、まるでモーゼの逸話のように割かれている。

その中心に《彼女》はいた。

まず目に入ったのは純白のタオル。俺が今、何よりも求めている物。

タオルを掲げた長身の女生徒がそこに立っていた。

長い長い金髪をはためかせ、青い瞳で真っ直ぐに俺を見つめている。

気高く、美しいその姿は、雪山にたつた一匹ひとひ残された白狼。

一瞬　ほんの一瞬ではあるが状況を忘れ、見とれてしまった。

「これを使いなさい。清潔さは保障するわ」

女生徒が俺のもとに歩み寄り、タオルを手渡す。

「…助かるっ」

タオルを受け取り、黒川の腕にあてがい、きつく押さえる。

赤黒いシミが真っ白なタオルをどんどん浸食していく。

黒川の傷は大きく、深い。恐らく何針も縫うことだろう。

それでも命には別状はないはず。俺の見立てが間違っていないければ、だが。

「はい。それじゃあ大急ぎでお願いしますね。はい」

風間を見ると、ちょうど電話を切った所だった。

同時に、沈黙していた美鳥がはっ、と顔を上げる。

「あ、あの…。私、先生呼んできます！」

「頼んだ。先に保健室な？その後職員室にも行ってくれ。保健室に誰もいなかったら体育教官室だ」

「はいっ。任せてください」
さすが俺の妹。立ちすくんでいたのは十数秒。
すぐに正気を取り戻し《できること》を行動に移す。
家では甘ったれの妹だが、実は生徒会役員に選ばれるほどしっかり者なのだ。

「救急車。十分かからないって」

「サンキユ。聞いたか？黒川、もうすぐ救急車が来るからな。もう大丈夫だ。待ってるよ」

「ありがとう…。天海先輩は…凄いな」

「…クロ？」

今にも消え入りそうな声。

力の無い、すぐにでも散ってしまいそうな音色。

「本当に…カッコいいよ…最期に、君の顔を見て…良かった」

「黒川ちゃん？」

「ねえ。もし、生まれ変わったら…」

震える右手を俺に差し出し、懇願する。

「僕を恋人にして……くれるか…な？」

俺が握り返そうとした瞬間。

黒川の腕が力を失い、落ちた。

「おい…」

瞳を閉じ、眠る様な表情。

見ようによつては笑顔にさえ見える表情。

何故。

何故だ。

どうして、どうしてこんな事になるんだ。

どうして

《死んだフリをするんだ》。

「瞼、ピクピク動いてんぞ」

「う、バレた？」

バレないわけが無い。

確かにかなりの出血量ではあるが、あの程度の出血で人間は死なない。

昔、安っぽい刑事ドラマを見ていた時に兄いもうとが言っていたので間違いないはずだ。

「マジで命に別状無いんだぞ。まあ、貧血くらいは起こすかもしれないけどな。病院に行くまでに出ていく血なんて、多めの献血程度だぞ」

ちなみに、ペットボトルに換算すると五百ミリボトル一本弱。洒落では済まない量だったりするのだが、黙っておく事にする。

「ちえっ。死んだら惚れてくれるかなーって思っ」

「どう言う思考回路だよソレは…。死んだら恋愛も何も無いだろ」

「そう、だね。じゃあ生きる事にするよ」

「ったく、このバカ。口を開けば変な事ばっか言いやがって。もう大人しくしてろよ」

空いた手で軽く頭を小突く。

緊迫した状況だと言うのに、思わず和み、笑いが漏れてしまった。これだけ馬鹿な事が言えるなら大丈夫だ。

風間も胸をなでおろしている。

ようやく一息つけそうだった。

嘆息し、後ろを振り返る。もちろんタオルを押さえつける手は離さない。

「ありがとう。《睦さん》…だよな？」

タオルを持ってきてくれた女生徒に礼を言う。

「私の事を知っているの？話した事はないはずなのだよ」

知らないわけが無い。

隣のクラス　A組の生徒、睦紅兎^{むつみへにと}。

まるでテレビや雑誌のモデルのようなすらりとした長身。彫りの深い美貌。腰まで届く美しい金髪。

同じ人間とは思えないほどに完璧にバランスのとれた顔のパーツ。《信じられない》と言う言葉でも足りないほどの美女。

知らない方がおかしい程の有名人なのだ。

ロシアの血を多く引いているらしく、長期休みのほとんどを海外で過ごしているらしい。

「隣のクラスだしな。タオル、汚してごめんな。新しいの用意しておくからさ」

「気にしないでいいのだわ。私は当然の事をしたまでかしら」

《だわ》、《かしら》どこか使い方に違和感を感じる語尾。日本に来たのが高校入学の時らしいので、ある意味仕方ないのかもしれない。

「気にするさ。睦さんが来なければ取り返しのつかない事になってたかもしれないんだから。本当に、ありがとな」

「ふふんっ。そこまで言うなら、その感謝。受け取っておくわ」

笑顔を向け、精一杯の礼。何故か顔を赤くする睦さん。

彼女は《当然の事》をしたと言った。

少し複雑な気分だ。

周囲を見渡す。興味の色を帯びた視線が俺達に向けられている。

こいつらは、その《当然の事》すらできないんだよ。

怒りで胸が張り裂けそうになる。
周囲の野次馬に、友人を護れなかった自分の無力さに、そして、
植木鉢を落とした犯人に。

《犯人》

一つ、嫌な《想像》が頭を巡った。
当たって欲しくない考えだった。
杞憂であって欲しい。嘘であってほしい。
もし、俺の《想像》が真実だった場合…
俺のせいで、
天海慶次のせいで。

彼女は、腕にずっと残る傷を負ってしまったという事なのだから。

嫌な《想像》

それは

世界が、反転した。

真昼の空から夕暮れへ。

野次馬が遠巻きに囲む中庭から、人混みで埋まった駅のホームへ。

頭が混乱している。

俺は今まで学校にいたはずだ。

黒川が大怪我をし、救急車を待っている途中だったはずだ。

違う！

頭の中から声が聞こえる。

違う。違う。違う、と。

朦朧とする意識の中、自分の状況を確認する。

尻もちをついた俺。がくがくと震える体。何故か制服の前ボタンワイシャツが外れ、Tシャツが露出していた。

視界の端に映るのは、怯えたような瞳で俺を見る群衆。ほとんどが平坂高校うちの生徒。

そつだ。思い出した。

俺がいるのは学校では無い。駅だ。駅のホームだ。

《俺は駅のホームから突き落とされたのだ。》

おぞましい感覚。後ろからの衝撃。今でも背後に残っている。

徐々に頭がはつきりとしてきた。途端に疑問が頭の中を支配する。当然の疑問。

《ならばどうして俺は生きているのだろう》、と。

俺はホームから線路に突き落とされた。

そして、目の前と言っても良い距離に電車が迫っていた。

なのに、何故生きている。何故挽肉ミンチになっていない。どうして内臓も脳漿もぶちまけずに《無傷》なのだ。

ふと、襟首に違和感を感じる。

これは、手。手の感触。人の手だ。
誰かが俺の襟を握りしめているのだ。
違和感を確かめるため、震える体を制し振り返る。

「に…兄さん…」
「ケージいつ！」

俺を見つめる二対の瞳。涙を滲ませた二人の女。
小動物のような妹、そして活発そうな女。

「助けて、くれたのか？」

こくり、と頷く二人。

奇跡としか言いようが無かった。

恐らく、俺が突き飛ばされた瞬間に二人が手を伸ばし、引き戻してくれたのだ。

買い換えただけの制服のボタンははじけ飛んでしまったが、命と比べれば安いものだった。

「あ、ありがとう」

声はいまだに震えている。頭も、完全にははつきりしていない。
体は凍りつく様に冷え、反対に心臓は全力疾走をした後のようにどくどくと高まっている。

自分の息遣いさえ聞こえるほどに身体感覚は研ぎ澄まされているのに、頭は現実とは違う場所をゆらゆらと漂っている。
奇妙な感覚。思考が纏まらない。霧がかかったようにぼんやりとしている。

だがそれでも、たった一つ、たった一つだけ確実な事がある。

俺の腰の下に残る感覚が教えてくれている。

俺の体に、心に刻み込まれた恐怖が教えてくれている。

間違いない。

俺は、間違いない

《命を狙われている》

3・大人の対応

六月十八日 午後七時二十分 一 《平坂高校》 駅 駅員室

映像の中の男は疲れているように見えた。

平坂高校の制服を纏った長身。丁寧に整えられた黒髪。

不鮮明な映像のせいで細かい顔立ちは分からないが、映像の男は紛う事なく俺 天海慶次だった。

疲れているように見えるのも無理はない。

あのとときの俺はボロボロだったのだ。肉体的にも、精神的にも。

何も喋る気が起きなかった。口を開く気力さえなかった。

当然だ。後輩の大怪我に加え、命を狙われているかもしれない恐怖。

全ての出来事が俺の肉体を、精神を蝕んでした。

肩を落とし、うなだれている俺。両隣りには妹の美鳥と、もう一人の俺を助けてくれた女生徒。

しばらく、映像は何事もない駅のホームを映し出す。

まるで働きアリのように蠢き、列をなし、散る人の群れ。

ほとんどは帰路につく平坂高校の生徒だが、会社員らしき男女や、大学生らしき若者、他校の生徒も交じっている。

映像の中の俺は動かない。魂の無い抜け殻のように電車を待ち、佇んでいる。

だが、数秒後。

突如、人混みが蠢いた。

次の瞬間、映像の中の俺がバランスを崩し、つんのめる。

口をぽかんと開けた間抜け面をしていたことだろう。たたらを踏み、黄色い線の外側へ、そして吸い込まれるように何も無い空中へ方足を踏み出す。

がくん、と沈む右半身。

駅の外まで響き渡る、けたたましいブレーキ音。

確かに、あの時俺は《死》を覚悟した。

だが、次の瞬間。

俺の背に伸びる二つの腕。

冥界行きの穴から引きずり出される体。

ブレーキをかけながら通過していく特急電車。

驚き、後ろに下がる周囲の生徒。

密集したいたせいか将棋倒しのように尻もちをつく者もいた。

目まぐるしく回りに回る状況。

だがそれは、わずか一瞬の出来事だったのだ。

「どう考えても押されてるだろ!？」

映像が流されていたモニターを指差し、俺が叫ぶ。

《事件》の後、俺が通されたのは駅員室とも呼ぶべき場所。

教室の半分ほどの広さの部屋。

いつもはカウンター越しにしか見えない内側。

電子機器の唸るような駆動音が、外のざわめきと混じり雑音となる。

不快な雑音は俺の耳を突き、いらだちと怒りに拍車をかける。

目に映るのはいくつかの作業机、パソコン、資料棚、そして壁一

面に広がるモニター。

そして、三人の大人。

一人は《鉄道警察隊》と書かれた紫の腕章をつけた若い警察官。

もう二人は、中年の駅員だ。妹たち二人は、何故か別室に通され

て行った。

「押されたって言うけどねえ……」

歯切れの悪い口調で駅員の一人が呟く。

「俺は押されたんだよ！間違いない。嘘なんか言っていないんだ！
今でも覚えている。俺の体に与えられた衝撃を。」

二つの、《手》の感触を。

あれは《事故》なんかではない。間違いなく、《故意》なんだ。

「嘘とは言っていない。うん。君は嘘をついてない。ただ、ねえ」

まるで泣きじゃくる幼児を諭す親の様な口調。

察しの悪い俺でも分かる。

この顔は《どうやって目の前のパニックに陥った高校生を落ち着かせようかと言葉を選んでいる》と考えている。

「うーん。何て言えばいいのかなあ。そのね、えーっと」

口ごもる駅員。彼の様子を見て、警官が割って入る。

「よくあるんだ。混雑してるときにさ。人がギユウギユウ詰めだろ
う？それで押される。で、押された人は思う。『突き落とされた！』
と」

感情を排した警官の言葉。

頭が真っ白になった。

警官の言葉の意味が一瞬、分からなかった。無意味な言葉の羅列
にしか感じられなかった。

次に、真っ白になった頭が真っ赤に燃えあがった。理不尽に対す
る怒りで、不条理に対する疑問で。

警官の言葉の意味を理解した。無意味な言葉の羅列が意味をなし、
連結した。

つまり、警官たちはこう言いたいのだ。

《お前が押されたと思っているのは勘違いでしか無い》と。

「っざけんな！俺は、俺は押されたんだよ！今でもあのクソみたいな手の感触が残ってんだよ！」

感情のブレーキを失い、口汚い言葉が思わず吐きだされる。

テールに身を乗り出し、警官の顔が近付く。

それでも、警官は無表情。

「だからね。なんていうかね。気にしすぎて言うの？」

俺の激高を諷めるかのように駅員が続ける。だが、目を合わせようともしない。

俺は駅員を睨みつける。無理矢理に目を合わせる。

突き落とされたなんて信じるつもりは無いと言う意思表示。

「人が密集しているせいでビデオには押された姿は映っていない。確かに君の言う事も分かる。だが、よく見るんだ」

警官がダイヤル型のコンソールを操作し、映像を撒き戻す。

「ここ。君が《突き飛ばされる》前のシーンだ」

ダイヤルを回すのをやめ、再生ボタンを押す。

《六番乗り場》と記憶している電車の乗り場。

何故か、普段は整列しているはずの、行列のバランスが崩れていった。

「分かるかい？《列のバランスが崩れて》いるんだよ。不幸な事故だったんだ」

「…そんな馬鹿な」

「証言だつて取れている。残っている生徒さん達に話を聞いたけど、君が突き落とされたように見えたって言う子はいなかったよ。全員が揃いも揃って、《誰かがぶつかってきてバランスが崩れてしまった》と発言している」

再び、コンソールをいじる警官。

映し出されたのは先ほどとは別のカメラからの映像。

携帯電話を耳に当て、人混みから離れようとする平坂高校の男子生徒が走っている。

恐らく、少しでも通話がしやすい場所に移動しようとしているのだろう。

かなりのスピードだ。全力疾走と言っても良い。人混みを避け、掻き分け、がむしゃらに走る。

だが、そこは帰宅ラッシュで賑わう駅のホーム。

走っている男子生徒が六番乗り場の行列に並んでいる生徒にぶつかってしまう。

それをきっかけに綺麗に整列した行列は、分裂し混沌となる。

「こう言う事だよ。分かったかな？ 押した子にも、走っている子にも悪気はなかったんだ」

相変わらずの無表情で警官が告げる。

「《原因》になった男子生徒には厳しく注意させてもらった。自分が何をやったのか理解して反省していた。それでも君は不満か？ 《不幸な偶然》だったんだよ」

熱に犯された頭が一気に冷める。誰も、俺の話を聞いてくれない。誰も、信じてはくれない。

ぶつかった男の話は事故と信じるのに、俺の話は信じない。

俺を押しした人間の言葉は信じるのに、俺の言葉は信じない。

冷め、沈む意識。押し寄せる失望感。

「だけど、その《不幸な偶然》が、もう《四度目》なんだよ……」
ビデオを見る前の聞き取りで、既に警官には説明してあった。

暴漢に襲われ、轢き逃げに遭いそうになり、植木鉢が落とされ、ホームから突き飛ばされた。

一つ一つは不運な事故だ。だが、丸一日の間にこのような《偶然》が起こる訳が無い。

確かに警官や駅員の理屈も理解できる。

カメラには明らかに偶然の事故の証拠を映し、証言と言う裏付けも取れている。

「だけど、けど、それでも」

「これだけ偶然が続けば必然としか思えないんだよ……。後輩だってケガしてんだ……。この事はどうやって、どうやってあんたらはどうやって説明するんだ!？」

膝の上で拳を握りしめ、訴える。

睨みつけるように、怒りを、嘆きを、全てを込めて声を絞り出す。

「うーん。確かにね、そうだよな」

しばしの思案の後、駅員の一人が漏らす。

「なあ、立花さん。被害届、書かせてあげたらどうです?」

今まで一言も喋らなかつた駅員が口を開く。

思いが通じたのだろうか。

信じて、もらえたのだろうか。

年長者二人の言葉に、困った顔をする立花と呼ばれた警官。

困った表情。無表情^{かお}だった警官が初めて見せた表情だった。

どうしてそこまで渋るか俺には全く理解できない。

それでも、俺にとっては大きな前進だった。

「じゃあ、被害届書こうか」

警官が鞆から《被害届》と書かれた紙を取り出す。

「ちゃんと聞くから、はっきりと答えるように」

睨むような目の警官。頷く俺。

これで警察に調べてもらい、犯人を捕まえてもらえる。

もう、恐れなくて大丈夫なのだ。

だが、何故か俺の胸には不安が渦巻いていた。

直後、不安は的中する。

俺は現代の司法システムの欠陥を知ることになる。

悪夢の始まり。

最低な数分間の幕開けだった。

3・大人の対応（後書き）

次回、最低な裁定。

4・現代司法の恐怖

「ちゃんと聞くから、はつきりと答えるように」

睨むような目の警官。頷く俺。

被害届、と書かれた紙を取り出す警官。

恐らく、今回の《突き落とし事件》の為に持ってきていたのだろ
う。

紙を広げ、日付を記入しながら彼はゆっくりと質問を始めた。

「まず、じゃあ君はどんな被害を受けた？肉体的、金銭的に」

最初の質問が投げかけられる。

「え…？」

だが俺は。その時点で言葉に詰まってしまふ。

被害、怪我、損害、そんな物は 無かった。

強いて言えば制服二着だが、犯人によって直接破壊されたわけ
はない。

「え？じゃなくて、どんな被害を受けたのかって聞いているの」

先ほどまでの困った顔は消え、相変わらずの無表情。

被害、と言われても困る。

黒川は怪我を負ったが、俺は今まで無傷なのだ。

「あと、大人に対しては敬語。気が立ってるのは分かるけどちゃん
と使いなさい」

「…すみません。普段は使うんですけど、ちょっと気が立ってました。
俺自身に被害はありません」

「じゃあ、目撃者とかは？君が襲われたって証明できる人はいる？」

「…いません」

嫌な予感がした。

「証言もない、被害もない、無い無い無いじゃ警察は動けない」
冷たく、突き放すような一言。
おかしい。何かがおかしい。
背筋が凍る。胸がざわめく。
まるで、無数の虫がぞわぞわと心臓を這い回っている感触。
俺は、信じてもらえたはずなのに。
だから被害届を出してもらったはずなのに。
なのに、どうして警官は否定的な事しか言わないのだ。

「なあ、天海慶次君」

初めて、警官が俺の名前を呼ぶ。
嫌な予感が、より勢いを増す。
心臓を這う虫が、口を開く。
駄目だ。それ以上は聞いてはいけない。言わせてはいけない。

「警察は、君の力になれない」

心臓を這っていた虫が一齐に牙を剥く。
物理的では無い、だが、確実な《痛み》が俺の胸を襲う。
予感的中した。
胸の中で警官の言葉が反復される。

《警察は、君の力になれない》

「強盗未遂はともかく、轢き逃げ未遂は立件できない。轢いてもいない車両を取り締まることは不可能だ。そして、今回の電車も《事故》と証明されている」

「後輩が怪我してるんだよ。なのに動かないってのか？」
「被害を受けたのは君じゃない。一度、学校と相談するべきだ」
「相談って、もしその間に何かあったらどうするんだよ!？」
「なら、君が襲われる理由を教えてほしい」
「それは…」

全く覚えが無い。覚えが無いのに襲撃は受けている。
ただ、被害が無いので警察は動かない。

考えられるのは俺が《襲われる理由》を《忘れ》てしまったこと。
八か月前の《事故》で負ってしまった《記憶障害》。そのせいで
俺は様々な事を《忘れ》てしまう。

だが、その事を上手く説明出来る自信もなかったし、説明した所
で警官の気が変わるとは思えなかった。

何故なら、彼は《マニユアル》に則って対応しているから。
法の番人としては正しい姿なのかもしれない。

だが、俺にとっては最低な警官だった。

「もしかしたら事件かもしれない。しかし、客観的に見ると《あま
りにも不幸な偶然》としか思えない。俺はおかしい事を言っている
かな？」

この瞬間、全ての違和感や疑問の謎が解けた。

警官が困った顔をしたのは、俺の証言から事件性を見出す事が出
来なかったから。被害届を出し、受け取った所で実質的な捜査が行
われる見込みが無いから。そのような事で無駄な仕事を増やしたく
ないからだ。

事務的で冷たく、攻撃的な態度を取っているのは、優しくした所
で結果は変わらないからだ。

そう、彼は《全て真実と認定したうえで、不幸な事故だと断定し
た》のだ。

事件性は無い、と。

「我が県の犯罪発生件数は、年間約八万件。この意味は分かるか？」

ああ、分かるぞ。

あんたはこう言いたいんだろう。

「事故か事件かも分からない高校生のガキの戯言たわごとに構うより、やる
ことがたくさんある、ってか？」

「そこまでは言っていないが、力になれないと言う事だ。納得して
欲しい」

ふざけるな。

納得できるわけ無いだろう。

俺だけが狙われるならまだいい。

巻き込まれ、黒川が大怪我をしたんだ。大切な後輩が血に染まっ
たんだ。

もしかしたら、美鳥だって、他の家族だって巻き込まれるかもし
れない。

もし、そうになったら、俺には耐えられない。

助けを求める様に、脇の駅員に目を向ける。

だが、俺の瞳に映るのは困った顔をした駅員達。

そんなにばつさり切り捨てて大丈夫なんでしょうか？苦情とか来
ないでしょうか？

俺には、彼らの顔が自分の保身を案じているように見えて仕方が
無かった。

- - - - -

頭の中が空っぽだった。

何も考えたくなかったし、事実、何も考えていなかったのだろう。気づけば、俺は駅員室を出て、切符売り場に立っていた。

どうやって会話が切り上げられたか、どんな気持ちで席を立ったか。全てを事細かに覚えてはいるが、まるで他人事のようにだった。

早く帰らないといけない。

また、襲われてしまうかもしれない。

徒歩は危険だ。家族に迎えに来てもらわないといけない。

電話をかけないと。

なのに、俺の体は指一本たりとも動いてはくれなかった。力が沸かない。何もする気にならない。

「もう、こんな時間か」

視界の端に、駅に備え付けのアナログ時計が映る。

時刻は午後八時を回っていた。

突き落とされた時はまだ夕方だったのに、既に駅の外は闇に支配されていた。

学生客の多い駅前の商店街は、既にシャッターの下ろされた店が多く、僅かな街灯が照らすだけだった。

もう、何もかも考えるのが面倒くさい。

このまま、あの商店街みたいに闇に溶ければいいのに。うな垂れ、地べたにしゃがみ込む。

そうすれば少しでも闇に溶ければ、嫌なことから逃げられると思ったから。

「もう、ケージ。なにをしてるの？」

女の声が耳に入る。

俺を呼んでいると気づくには一瞬の間を要した。

「兄さん、お疲れですね。大丈夫ですか？」

顔を上げ、確認する。

俺の前には、二人の女が立っていた。

駅のホームで俺を助けてくれた二人組。

一人は、小動物の様なロングヘアの少女。

もう一人は、外に跳ねたセミロングが印象的な女。

「大丈夫だ。多分」

「大丈夫じゃないわよね、ソレ。あたし達も事情聴取されたけど、全く相手にされなかつたもん。カメラと証言が事故

を裏付けてるー！って言うけど、その前に襲われた事件が無関係な訳無いじゃないっ」

「祈衣姉さんの言うとおりですよ。どうしても、って言うなら被害者を呼んで来なさい、なんて…」

「呼べるわけ無いじゃない…。あんなに怖い思いをしたのに」

ロングヘアの少女　妹の美鳥がしゅん、とうな垂れる。そして、落ち込んだ美鳥を慰めるように撫でる祈衣姉さんと呼ばれた女。

まるで、仲の良い姉妹の様だ。

姉妹でなくても、物心ついたときから仲良くしている様な

まさか。

「なあ、美鳥」

一つ、疑問を口にする。

「はい、何でしょう？」

これだけの事件に巻き込まれ、考えたくもない事実だったのだが、口にせずにはいられない疑問。

「あのさ。お前の隣にいる女の子の事だけだな」

言いたくなかった。杞憂であってほしかった。

「…!!」

「っ!!」

二人の顔が硬直する。

それは、俺の想像が当たっている事を示していた。

「その子 祈衣姉さん、だっけ？」

「もしかして…」

「兄…さん。冗談ですよ？幼馴染の、祈衣姉さんですよ…?」

この状況で冗談なんて言えるわけが無い。

聞き覚えのない名前。見覚えのない幼馴染。

答えはもう、分かりきっている。

それなのに、俺は続けてしまう。何故か、止めれなかった。

「一体、誰…なんだ？」

頭の中を《記憶障害》と言う単語が埋め尽くす。
八か月前の事故で負ってしまった脳障害。

そう、俺は。

幼馴染であるはずの彼女の事を

全く覚えていなかったのだ。

4・現代司法の恐怖 (後書き)

本当は3、4は1本にまとめるはずだったのだけど、長くなりすぎちゃいました。げふん。

次回、ケージの記憶障害の説明。コメディ編である《日常編》の人には二重に説明する事になってしまいますが。

5・記憶障害と決意

「ケージ、あたしのこと、《忘れ》ちゃったの」

重い言葉とは裏腹に、彼女の口調はあっさりしたものだった。幼馴染、と言っていた割にはドライすぎるような気がする。

「すまない。本当に、すまない」

「何でそんなに暗いのよ。ケージらしくないわよ。《忘れ》たら、思い出せばいいだけじゃない」

「思い…出す。そうだ。そう、だよな」

ゆっくりと深呼吸。

確かに俺は彼女の事を《忘れ》てしまった。

だが、忘れたのなら思い出せばいい。

彼女の言葉で少しだけ気力が戻る。

「まず、君の名前を覚えてほしい」

「あたしは、風間祈衣。ケージの幼馴染で、探偵よ」

「探…偵？」

日常生活では聞きなれない単語に、少々戸惑う。

高校生で、探偵。マンガやアニメじゃあるまいし、おかしな話だと思う。

だが、目の前の女 風間さんは冗談を言っている目では無かった。

大きく息を吸い込み、続きの言葉を吐きだす。

それは、俺にとってあまりにも予想外な言葉。

「そう、あたしは探偵。高校生探偵。名探偵。間違いなく、誰もが

認める探偵。探偵探偵探偵探偵探偵探偵名探偵探偵探偵探偵探偵
偵探偵名探偵探偵探偵探偵探偵探偵探偵探偵探偵探偵探偵探偵
名探偵探偵探偵探偵探偵探偵探偵探偵名探偵探偵探偵探偵探偵探偵
名探偵名探偵。風間祈衣は名探偵」

予想外どころか怖かった。目が据わっていた。

「怖いっ！目が怖いっ！何で連呼するんだよ！マインドコントロールでもするつもりなのか!？」

据わった瞳で探偵探偵と連呼してくる風間さん突き放す。思わず力が入ってしまった。

「マインドコントロールは探偵の必須技能よっ」

「どこの次元の探偵だっ。どこの世界のサイキック諜報部員だソレは！」

突き飛ばされてもどこ吹く風。全く気にする素振りを感じられない。

「とにかく、あたしは名探偵なの」

「本物の名探偵なら、わざわざ記憶障害の人間に向かってマインドコントロールはしないだろ！」

得意気な自称名探偵に向けて思い切り叫ぶ。

とりあえず、彼女が《探偵ではない》事だけはよくわかった。本当の探偵ならマインドコントロールはしない。多分。

俺の叫び声に周囲の通行人が目を向ける。

妙に気恥しくなり、風間さんを半眼で見る。

「ふふふっ。ようやく少しは元気が出てきたじゃない。ケージらしくなってきたわよ」

俺の叫びにも、そして責めるような視線にも全く怯むことなく、笑顔を見せる風間さん。

何故か、勝ち誇ったような表情に見えた。

「さ、さすが祈衣姉さんですね。私には出来ない事を平然とやって

のけるなんて」

美鳥が感嘆の声を上げる。

そこで俺はようやく理解した。

彼女は俺に覇気を与えるためにわざと奇行に出たのだ。

「…ありがとう。もう、大丈夫だ。本題に入ろう」

馬鹿話から、真剣な話題にスイッチを切り替える。

去年の秋、俺は交通事故に遭った。

スピード違反の乗用車に撥ね飛ばされ、頭を強く打ち瀕死の重傷を負ったらしい。

その後遺症で、俺は《記憶障害》に悩まされている。

「俺の、《記憶障害》」

「兄さんはその日一日で見たり、聞いたりした物を《忘れ》る。睡眠を引き金にして」

「だけど、《忘れたことば》を誰かの口から聞けば《思いだせる》。自分達に確認させるように、お互いが順番に口にする。

風間さんの事を《忘れ》ているのが嘘かのように、俺達の息はびつたりだった。

「あれ、でも兄さん。今日は眠ってないですよ。駅の時も普通に祈衣姉さんとお話してましたよ」

「多分、電車に轢かれそうになった時に意識が飛んだんだよ。聞いた事がある。人間の防衛本能で、死の恐怖に直面すると死ぬより先に意識を失う事があるって、な」

あの時、俺は確かに死を覚悟した。自分がバラバラの肉塊になる姿を想像した。

想像した痛みが現実になる前に、俺の本能は意識を失う事を選んだのだろう。

「たった一瞬でも《忘れ》るんだ。キツイね」

「もう慣れた。気にしてても始まらないからな。だけど、名前を聞いても思い出せないって事は、《巻き込まれ》てるな」

《巻き込まれる》。

頭の中で反芻する。

俺の記憶障害は、直接《忘れたことば》に強く関係した物も《忘れ》てしまうのだ。

例えば、《ミッキーマウス》と言う《ことば》を《忘れ》た場合、ミッキーマウスに関係した《ディズニー》《ディズニールランド》なども《忘れ》てしまうのだ。

それだけならまだしも、《ミッキー》が大好きで大好きでたまらない友人《が》いればそいつの事も記憶から失われてしまう。

唯一の救いは、先ほど風間さんも言っていたが《思いだせる》こと。

《忘れたことば》 この場合は《ミッキーマウス》 を文字として見たり、音声として耳に入れる事が出来れば、巻き込まれた記憶も含めて全てを思い出す事が出来るのだ。

「風間さんの名前を《忘れ》たわけじゃなければ、風間さんを強く印象付ける何かを《忘れ》たって事だよな」

「そう、なるわよね。だけど、あたしは探偵以外に特徴なんて無いわよ」

いや、探偵じゃないだろ。絶対に認めないぞ俺は。

「スタート地点で八方塞り、ですね」

「いいんじゃない？いつかきつと思いつくわよ」

あっけらかんと言いつつ風間さん。

きつと、彼女は大物か大馬鹿のどちらかだ。

「そう言う訳にもいかないだろ。もしかしたら《忘れ》た記憶の中に襲われた理由が隠れているかもしれないんだから」

被害届を書いていたときに感じた事を口にする。

もしかしたら、《忘れ》た記憶の中に狙われる理由が潜んでいるのではないかと。

《忘れ》た記憶を思い出す事が出来れば何らかの対処ができるのではないかと。

「うー。襲われた理由がメインなの？あたしの事はどうでもいいわけ？あたしとケージの命どっちが大事なのよー」

「記憶障害の人間に向かって冗談なのか本気なのか分からない発言は止めてくれ。どう返して良いのか本気で分からないから」

「ギャグよ」

「よし分かった。少し黙ろうか」

「うう。ケージが冷たい。でもさ、考えてみたんだけど、ケージが襲われた理由って一つしか無いんじゃない？」

「え？」

ふざけた発言の直後に、さらりとんでもない事を言う風間さん。思わず上ずった声で返事をしてしまう。

「うーん。でも、違うかも。もしアレだった場合、あたしも狙われてなきゃおかしいし」

「もったいぶるなよ。何か一つでもいい、手掛かりでもいいから教えてくれ」

そう、何でもいい。どんな《ことば》でもいい。

《忘れ》てしまった友人の事を思い出せるなら、襲われた理由のヒントになるなら、どんな事でも知りたい。

「大したことじゃないわよ。二週間前の事件、覚えてる？」

「二週間前…？」

「そう。ケージは、あたしと一緒に学校で死体を発見したの」

ぞわり、と体に鳥肌が立つのを感じる。

死体？そんな馬鹿な。全く覚えていない。

呆然とする俺を見て風間さんがにやりと笑う。

「きつと、ケージが《忘れ》てるのはそれね」

俺が、学校で死体を発見した事を忘れている？

冗談みたいな話だ。ありえない。どうせさっきの様なギャグに決まっている。

そのはずだ。

美鳥の顔を見る。「そんなマンガみたいな話がある訳無いじゃないですか」と言ってくれることを期待して。

だが、

「兄さん。本当です。兄さんは二週間前、学校の音楽室で死体を発見しています」

美鳥の放った言葉は、あまりにも現実離れした出来事を真実と認めていた。

ただ、問題は《音楽室》と言う単語も俺の記憶にはないのだが。

恐らく、《死体を発見した事件》に関係があるから《忘れ》てしまったのだろう。

語感から、音楽の授業を行う教室と推測する。

「死体を見つけたせいで、狙われてるって言うのか？」

「かもしれない、ってだけよ。だって、一緒に発見したあたしは何もされずにケージだけ襲われるなんておかしいじゃない」

確かに、彼女の言う通りだ。

一緒に死体を発見して、俺だけ狙われているのは説明がつかない。

「それでも、もしかしたらって事がある。もっと詳しく教えてほしい」

その《死体》の話が《風間祈衣》の記憶に繋がる可能性は高い。

俺が狙われる理由も大切だが、何より《友人》の事を忘れたままにいる事が何倍も辛かった。

「と、言っても大したことないわよ。放課後の音楽室に行ったら首吊り死体があった。それだけだし」

「それだけ……って、十分オオゴトだろ、それ。首吊りって事は、自殺なのか？」

「ううん。事件。二、三日で犯人は捕まったけど」

事件。殺人事件だろうか。

学校に殺人犯がいた。吐き気がする様な気持ち悪い話だ。

俺の表情を見てとったのか、風間さんが努めて明るい声で告げる。

「違うわよ。殺人じゃないの。事故死なの」

風間さんが事件の概要について説明を始める。

事件が起きたのは、六月四日の放課後。

定期テスト前で殆どの部活は停止状態。

人気のない学校の屋上で、3 - Aに属する三人がある《度胸試しのゲーム》にいそしんでいた。

A組は特進コースと呼ばれる難関大学や学部を目指す優等生の集まり。

三人も他聞に洩れず、とびきりの優等生。おそらく、ストレスもあつたのだろうが、彼らの行っていた《ゲーム》は過激なものだった。

《命綱をつないで、屋上のフェンスの外側でレースをする》

正確にはレースではなく、タイムアタックらしいがそんなことはどうでもいい。

命綱をつけて、安全にスリルが味わえる。

彼らにとっては受験と、優等生というレッテルによる重圧から解放される唯一の瞬間だったらしい。

彼らはその《ゲーム》にハマっていた。

だが、そこで事故が起きた。

三人のうちの一人が落下してしまったのだ。

命綱がある、と安心していたのも一瞬。彼はその命綱に首を取られて落下してしまう。

痛みは、無かっただろう。首の骨を折り、即死だったらしい。

「それで、怖くなったんでしょね。残った二人　高森君と保志君って言うんだけど、《偽装》したのよ」

「そんな、まさか…。そんな死人に対して冒涇みたいな行為…！」
「あと半年で受験。いい大学に入って、良い企業に就職する。当たり前の未来が壊れていくのが我慢できなかったんじゃないかな。あたしには理解できないけどね」

偽装。《犯人》の二人は被害者を音楽室に運び、天井から吊るした。自殺に見えるように。

「だけど、警察にはそんな素人の偽装は通じなかったの。見破ったのはケージのお兄さんのよ？」

「兄…？」

「あつ。事件に関係してるんだからお兄さんの事も《忘れ》てるのね。お兄さんは検視医なの」

明るく振る舞う風間さんだが、俺の気分は更に沈んでしまう。

友人だけでなく家族も忘れてしまっているのか、俺は。

初めての経験と言う訳でもないが、それでも胸が罪悪感で締め付けられる感覚がした。

「けど、そのお陰でケージが何を《忘れ》たのか、絞れてきたわよ」
「ほ、本当ですかっ？」

今まで黙っていた美鳥が歓喜の声を上げる。

「ええ、本当よ。名探偵を舐めないで」

風間さんが美鳥に向かつてVサイン。不敵な笑みを浮かべている。「今までの聞き取りから、ケージが《忘れたことば》は、《音楽室》《梶原君の死体》《あたし》《お兄さん》に関する事。これら全ての条件を満たす《ことば》と考えられるわ」

まさか、本当に彼女は名探偵だったとでも言うのだろうか。にわかには信じられないが、ほんの十数分で俺の《忘れたことば》に辿りついたと断言するのだから、信じるしかない。

「ケージが忘れた《ことば》 それは」

「ごくり、と唾を呑む。」

ほんの一瞬の間の筈なのに、何分間にも感じるほどに時間が引き延ばされた感覚。

世界がスローモーションになった気がした。ゆっくり、ゆっくりと風間さんが口を開く。

息が漏れ、声が届く。

「梶原正明、高森一郎、保志ヒロシ、この三人の誰かの名前よ！事件の被害者と加害者のねっ」

びしり、と俺を指差し、高らかに宣言する風間さん。

その声には、魔力とも言っていていいほどの力と説得力があった。だが、

「あれ？」

俺には何の反応もない。

記憶を取り戻すどころか、三人の名前すら覚えが無い。

「ちがつ…た？」

「違うな」

六月も下旬に差し掛かると言うのに、寒い、寒い沈黙が支配した。真冬のシベリアの様に凍えた空気が俺達を包む。

気のせいか、枯葉が舞っている気がした。

「あれー？おかしいわね」

「おかしいのはお前の思考回路だよ。その三人は俺の兄とか風間さんとは関係あるのか？」

これまでの情報から、《忘れたことば》は、《音楽室の事件》と《風間祈衣》と《俺の兄》に關係していなければならぬ。被害者達三人は、後ろ二つの条件を満たしていないのだ。

「うーん。言われてみれば確かに。けど、絶対にあの《死体遺棄事件》と關係してると思っつものよ」

「《死体遺棄：事件》…？」

心臓が止まったかのような感覚。

次の瞬間、俺の頭の芯に疾る疼き。

「って、あれ？もしかして…」

「大丈夫ですかっ。兄さん！」

二人の心配する声が、まるでどこか違う世界からのように遠くから聞こえる。

疼きは痺れへと変わり、頭の芯から全体へと浸食していく。

そして、痺れが痛み変わり、

痛みは《記憶》へと姿を変えた。

バラバラになった記憶の欠片が渦を巻き、頭の中をかき回す。

昼間の学校。

植木鉢が落ちる直前。黒川が怪我をする寸前の記憶が再生される。

「それ、本当？」

昨夜、二度も命の危機に遭遇したと告白した俺に対し、信じられない、と言った表情の風間さん。

「嘘を言っただろうなんだよ。マジで死ぬかと思ったんだ」
言い返す俺。

「これは事件の予感ね。今度こそあたしの…高校生探偵の出番よっ」
風間さんが高らかに宣言する。

そうだ、彼女は　こいつは、いつもこんな突拍子もない事を言うんだ。

「二週間前の…《死体遺棄事件》のリベンジよっ!」

そう、だ。

死体遺棄、事件。

俺が《忘れたことば》それは　《死体遺棄事件》だ。
《ことば》を認識した瞬間。バラバラだったパズルのピースは急速に組み立てられ、はつきりとした《記憶》に形成される。

音楽部ぶがくで向かった音楽室。

生まれて初めて見た本当の《死体》。

首がヘシ折れ、虚ろな目で俺を見ていたあの視線。

あまりの恐怖におびえる俺。くだらない冗談で、恐怖から解き放つてくれた自称名探偵。

相談に乗ってくれた優しい兄。

全て、全て思い出した。

「もう、大丈夫だ」

急激に引いていく頭痛の波を感じながら告げる。

「なら、兄さん」

「思い出したのね？」

ああ、思い出した

《風間祈衣》

彼女は、自称名探偵で、自称幼馴染で、記憶障害を負った今でも親身に接してくれる

かけがえのない

《友人》だ。

「ああ。だからさ、もう無理して明るくしなくて大丈夫だぞ」

「え…？」

俺は知っている。覚えている。

死体を発見した時、襲撃に不安を感じていた時、記憶を失い怯えていた時。

俺の精神が不安定な時、彼女がいつも馬鹿な事を言っただけで元気を与えてくれる事を。

「いつも、迷惑掛けて悪い。こう見えても感謝してるんだぜ？」

「殊勝な態度はケージらしくないわよ？」

「うるさい。たまにはいいだろ。風間には世話になってるしな、一応だよ。一応」

「あれ、照れてるんですかー？兄さん」

顔を赤くする俺。からかう風間と妹。

記憶が戻り、全てが元通りになったのだ。

いや

まだだ。

まだ、《襲撃》の謎は解明されていない。

俺は何度も命の危機に陥り、後輩の黒川が大きな傷を負った。

警察は動かないし、動けない。

問題は山積み。危機は一つも去っていない。

どんな時でも、俺を心配し、勇気づけてくれる自称探偵の姿を見て、思う。

まるで主人を見失った子犬の様な不安げな瞳で俺を見つめる妹を見て、思う。

もし、再び彼女たちが巻き込まれたら、と。

次に巻き込まれるのは風間や美鳥かもしれない。

後輩の腕から溢れ出る血が、痛みに悶える顔が、赤黒く染まった制服が、鉄錆の様な鮮血の臭いが再生される。

次に黒川に何かあったら、彼女は本当に命を失ってしまうかもしれない。

友人や、家族を失う。吐き気さえ感じる想像だった。

記憶障害で日常生活を送るのもギリギリな俺を、明日には彼女たちの事を《忘れ》ているかもしれない俺を見捨てないで付き合ってくれる連中を失う。

そんな事に俺は耐えられない。

頭の中で一つの《意思》が煙を上げ、くすぶっている。

その《意思》を実行する事は、あまりにも危険で、常識外れで、馬鹿みたいだと普段なら笑い飛ばすことだろう。

恐怖はある。迷いもある。

逃げ出せるならすぐにも逃げ出したいし、投げだせるならすぐにも投げ出したい。

たかだか素人の、記憶障害持ちの高校生に何ができるのかとも思
う。

それでも、覚悟をするしかなかった。

俺がやらなければ、大切な家族が、友人が巻き込まれ、傷つき、
失われるかもしれないのだから。

そう、俺の中でくすぶる意思、それは。

《犯人に立ち向かう》こと。

犯人を見つけ出し、自らが行った襲撃を認めさせる。

俺達に二度と手だしが出来ないように。

俺の心の中の何か小さな火を放ち、燃え始めているような、そ
んな気がした。

第一話 《見えない敵》と《命の危機》

終

5・記憶障害と決意（後書き）

くそ長い。

しめんなさいしめんなさいしめんなさいしめんなさい

1・ブラコン兄さんと、慶次の決意（前書き）

《検視》

変死者又は変死の疑のある死体及び遺体を、検察官が検視を行うこと。

その場合、必ず医師の立会いをもとめて、死体を検分しなければならない。

彼らの用語で《死体》は身元不明のもの。

《遺体》は身元の分かる物、という区別がされている。

1・ブラコン兄さんと、慶次の決意

六月十八日 午後十一時五十分 天海家リビング

ぎしり、と椅子のきしむ音がした。

ダイニングテーブルを挟み、俺の目の前には渋い顔をした眼鏡の男が座っている。

中背だか、枯れ木のように細い体つき。年齢は大学生ほどに見えるが、実は三十一歳。

干支一回り離れた俺の兄。天海大鷹^{ひろたか}だ。

重々しい沈黙が部屋を支配する中、兄が口を開く。

「轢き逃げは実際に轢かれた訳でもない。暴漢も、誰かが見た訳でもないし、ケージが怪我をした訳でも無く、何かを奪われた訳でもない。事件が起きないと警察は動けないんだ」

いつも柔和に微笑んでいる細めの瞳が今はぴくぴくと震えていた。兄は《検視医》だ。警察に協力し、不審な死体や遺体の死因を調べる重要な職務に就いている。

兄なら、事件の力になってくれるかもしれない。

そう思って相談したのだが、彼の答えは俺の楽観的な予想を裏切るものだった。

警官が言っていた事の繰り返し。

頼ろうとすれば頼ろうとするほどに突き放される。

まるで、《見えない犯人》に全ての道をふさがれている様な、そんな気さえした。

《捜査の開始》と《目撃者》

「僕から捜査課の人に話を通してみる」

冷めきったコーヒーをすすりながら、兄が絞り出すように声を発した。

「既に検察は裁判に向けて動き出しているはずだから、どこまで動いてもらえるかは分からないけど…期待しないでね」

兄には分かっているのだろう。一度方向性が決まった捜査を覆すのがどれだけ難しいか。

そうでなければ冤罪事件など起きるはずが無い。

「植木鉢の事から攻めてみれば…あるいは。《死体遺棄事件》の起きた学校だし、何かの因果関係を見出してもらえるかもしれない」

植木鉢。

俺が狙われ、破片で黒川が大怪我をしたガラスの植木鉢。

救急車が去ってから数時間後。黒川からメールが来た。「心配無い」と。

六針を縫う事にはなったが健康に別状はなく、明日は登校してくるらしい。

「そう言えば。植木鉢の事で警察は今日、来なかったな。てっきりまた大騒ぎになると思ってたのに」

「多分、明日以降も来ないと思う。ただでさえ二週間前に事件が起

きたんだ。警察なんて呼んだらまた大騒ぎさ。学校側としては何としても穏便に済ませたいんだろっね」

困ったような、呆れたような兄の言葉に感情が高ぶる。

「なんだよソレ！十五の女の子が、俺のダチが腕にあんなデカい傷を負わされたんだぞっ。許せるわけ無いだろっ？」

「僕も…許せないよ。犯人も、警官や学校の対応も。とにかく、明日警察に電話してみる」

兄も悩んでいる。そう見えた。

警察の協力者として、一人の兄として、ルールと感情の間に挟まれているのだ。

悩むなと言う方が無理であろう。

「迷惑、かけてるよな。ごめん」

「頭を下げる事はないよ。慶次は被害者なんだからね

「ありがとな、兄貴。本当に…」

記憶障害の事だけでなく、こんな事まで世話になって。

自分が無力な高校生でしかないと言う現実を痛感する。

「だけど、あまり期待しないでね。可愛い弟の為だからできる限りはするけどさ。とにかく、警察には伝える。約束するよ」

兄が俺に向けて腕を伸ばす。

俺の伸ばし返し、握手。

俺と兄が何かを約束をする時の儀式。

他の家で言う所の、指切りの代わりとさえいいのだろうか。

いまいち理由は分からないのだが、我が家では《そういうこと》《》になっっていた。

どこの家にもあるローカルルールのようなものだ。

兄が俺に向けてほほ笑む。そこには先ほどのような歪んだ表情は残っていない。

「あやしい」

「！」

「み、美鳥っ!?!」

気づけば、美鳥がリビングのドアの前に立って俺達を半眼で見
いた。

クマのプリントの入ったピンクのパジャマ。肩まであるストレー
トの黒髪が湿っているのは今まで風呂に入っていたからだ。

「なんか、怪しいです」

「何がだよっ。って言うかどこから見てたんだお前」

「可愛い弟のあたりからです」

よりもよって誤解を招く所だけ聞いていた。

「まさか、兄さん達がアヤシイ関係だったなんて…」

「んな訳あるか!」

「そうだよ。確かに僕は慶次も美鳥の事も大大好きだけど、怪し
いことなんて考えた事は…無いと……思う?」

「何で疑問形なんだよ。このブラコン!」

若づくり、高収入、頭脳明晰。非常にハイスペックな自慢の兄。

両親が共働きで、兄とは年も離れていることもあり、親代わりと
もいえる存在なのだが、とにかくこの男は俺達に甘い。甘やかす事
に命をかけていると言ってもいい。

強烈なブラコンかつ、凄絶なシスコン。

それが天海大鷹と言う男だった。その兄に甘えて無理難題を押し
付けたのは俺なのだが。

「これは、祈衣姉さんに教えないと…」

「教えるなっ!」

兄にツッコミを入れている隙に美鳥がとんでもない事を言う。

あの自称探偵の耳に入ったら光の速さで学校中に広められてしま
うに違いない。

それだけは、絶対に、命を賭してでも阻止しなければならない。

「あ、こらっ。逃げ…っ」

既に美鳥の姿はドアの前には無い。

警戒に階段を駆け上っていく足音が聞こえる。どうやら部屋に逃げ込むつもりようだ。

「待てバカ！待ちやがれ！」

飛び上がるかのように立ち上がり、俺は妹を追いかけるのであった。

六月十五日 午前零時十五分 天海家 慶次自室

「 って訳だ」

「なるほど。ケージとお兄さんは怪しい関係……」

「じゃねーよっ。そんな事は一言も言っただろうっ」

どうやら既に美鳥の口から漏れていたらしい。明日の朝食にあいつの嫌いなセロリを入れる事を誓う。

リビングから自室に戻り、風間に電話。

兄が警察に伝えてくれる事を教える。

「後は警察に任せる感じになりそうなの？」

「どうなんだろうな、兄貴の話じゃ『僕の人望次第かな』って事だし、自信はなさそうだった」

「そもそも、ケージがどうして狙われてるのが分かってないもんね」

「そう、なんだよな」

とにかく問題はそこだった。

俺は命を狙われている。それだけは間違いない。

強盗、轢き逃げ、植木鉢、ホームからの突き落とし。

強盗以外は傍から見れば、不幸な事故。

俺に《狙われる理由》のようなものがあれば、全ての《事故》に因果性が発生し、警察も事件として捜査できるのだが、全く覚えが

無い。

「なあ、風間」

『どしたの？ケージ。深刻な声で』

「俺は、自分でも事件の事を調べようと思ってる」

『へ？』

「どうしたんだ風間？アホみたいな声で」

『え、い、いや、ケージがそんな事言うのが意外で』

確かに、トラブルに首を突っ込むのは俺のキャラクターでは無い。どちらかと言えば風間の方だ。

俺は《記憶障害》と言うハンデを背負っているせいで、どうしてもトラブルを招きやすい。

約束や日々の会話を《忘れ》、それがトラブルの火種になってしまふ事が多い。稀にはあるが暴力沙汰になる事もある。

だから俺は、自分からトラブルに飛び込む事はしない。出来るだけ波風立てずに生きる。

そうやって事故から一年近く過ごしていた。

だが、今回ばかりは大人しくしている訳にはいかなかった。

「クロが巻き込まれた。夏を前に、でっかいキズを負っちゃった。

六針だ。いつ消えるかも分からない傷を、十五のアイツがだぞ！？アレじゃ制服を着ても丸わかりだし、あんまりだろ！」

血に染まった後輩の痛みに歪む顔が頭に浮かぶ。

噴き出す鮮血を見て、今にも涙を流しそうな不安げな瞳が頭に浮かぶ。

全て、俺のせいだ。俺が巻き込まれたトラブルのせいで彼女は傷ついた。

自然と、語気が強くなるのを自分でも感じる。

「次はお前の番かもしれない。美鳥の番かもしれない……！次にクロが巻き込まれれば、本当に死んじまうかもしれない！俺のせいでだ

っ！そんなコト…耐えられるわけ無いだろ！？」

『ケージ…』

「警察には不満だらけだよ。けどな、グダグダ言った所で何も解決しないんだ。だったらやるしかないだろ？」

深呼吸し、息を整える。

とんでもない事を考えているのは分かっている。

それでも、やるしかなかった。

「俺の自衛のために」

そして、俺の大切な家族と友人の為に。

「俺は、自力で犯人を探す」

数時間前には煙を立ててくすぶっているだけだった《想い》が、小さな炎となって燃えているのを、俺は確かに感じていた。

2・作戦タイム!

「俺の自衛のために　俺は、自力で犯人を探す」
静かな、それでいて固い決意を風間に伝える。

『犯人探して、どうするつもりなの?』

当然の疑問。だが手がかりが無いわけではない。

「とりあえず植木鉢を落とした犯人だな」

『そうね』

風間が同意する。

駅での事件は完全に事故扱い。それどころか、原因であった男子生徒から直接電話がかかってきて謝罪も受けた。後日、改めて詫びたいと言葉と主に。

もし、彼が犯人だったら連絡は一切してこないだろう。

不本意だが、電車の件は事故と思うほかなかった。

と、なると残されたのは昼間に起きた植木鉢の事件。

『恐らく、相手は複数犯。強盗に轢き逃げ。何人いるか分からないけど、数が多いって事は、そこから犯人に辿り着きやすいってワケだし、植木鉢の犯人探し良いと思うわよ』

風間が自身の推理を述べる。

「夜道を迂闊に出歩かなけりゃ、襲われる事もそうそう無いだろうしな」

『確かにそうかも。ところで、高校生探偵の手助けは...』

「必要ない」

予想していたことではあったが、提案を拒否。

この女は好奇心は猫を殺すと言う言葉を知らないのだろうか。

「正直な話、お前を巻き込みたく無いんだよ。だから、お前は大人しくしててくれ。頼む」

「ケージ…」

制服のブラウスを赤黒く染め、不安そうに震えていた黒川。

もう誰もあんな目に会わせたくない。その為に俺は自力で捜査をする事に決めたのだ。

しかし、俺の心からの言葉に風間は、

「イヤよ」

あっさりと突っぱねた。

「ケージがあたしの傷つく姿を見たくないように、あたしもケージの傷つく姿を見たくないもん」

「お前、ケガじゃ済まないかもしれないんだぞ」

「ケガがなによっ。あたしはケージに命を救ってもらった。それに比べたらこれくらいどうってことないわ」

命を救った。

俺は風間の命を救ったらしい。

去年の《交通事故》の事だと言う。

俺は車に轢かれそうになる風間を庇い、頭に傷を負ったと聞いている。

「その事なら気にするなっつていつも言ってるだろ？俺自身、事故の事は全然覚えてないんだから」

頭を打った衝撃か、その後に発覚した記憶障害のせいか、俺は事故の事は全く覚えていない。

誰を庇ったか、それどころか何故外にいたかも、全くだ。

それだけじゃない。俺は

「俺は」

『それに、幼馴染だしね』

俺の言葉を遮る風間。その口調はやたらと明るい。だが、彼女の明るさとは逆に、俺の胸は締め付けられるように痛む。

どうして風間はそこまで親身になって接してくれるんだ。

家族と同じように。家族以上に。

俺にそんな価値はないのに。あるわけないのに。

何故なら、俺は

「お前の事も、《忘れ》てるんだぞ……」

風間祈衣の事さえ《忘れ》ているのだから。

俺は風間に関する《交通事故以前の記憶》がない。

彼女と最初に出会ったのは、病院のベッドの上。

見知らぬ幼馴染が話しかけてきたときの驚きと狼狽、そして《忘れ》た事を知った時の風間の悲しみに歪んだ表情は、皮肉な事にも鮮明に思い出せる。

「なあ、お前。俺が記憶障害になった事、まだ気に病んでんだろ？」
その罪悪感が、ただの幼馴染に対し家族以上に親身に、そして献身的に接しさせるのだろう。

確かに、俺は事故を呪った事もある。恨んだ事もある。今でも時間を戻せるなら戻したいと心から思う。

それでも、風間祈衣が俺の為に神経を、時間を、労力を俺のために費やすのは望んでいない。

「いつも言ってるけど、事故そのの事はもう忘れてくれよ。俺は事故の事も、事故以前のお前の事も覚えてない。だから」

『でも、ケージ一人でどうするの？』

「え？」

俺の言葉に風間が割り込む。

『平坂高校の生徒総数は約三千人。もし、目撃者がいたとしても絞りこむのも一苦労よ?』

「そ、そんなの地道に」

『何日かかるか分からない。その間に、また誰かに襲われるかもしれない。どうするつもり?』

「う…」

痛いところを突かれ、口ごもる。

それをチャンスに思ってたか、豊みかけるように風間が続ける。

『って言うか、無理に突っぱねても無駄よ?どんなに拒否しても、あたしは勝手に調べる。ケージの為に。ケージが自分の為だけじゃなくてあたしを含むみんなのために捜査をしようと思ってるみたい
に、ね』

「お前」

『それに、友達いないケージには、アタシの交友関係じゆうゆうかんけいは必要だと思
うけど?』

譲るつもりはない。彼女はそう言っている。

いつもフラフラフワフワしている癖に、こつ言う時だけ妙に頑固
なのだ。この女は。

「チツ」

内心とは裏腹に舌打ちが漏れる。

不快では無い胸の温かみ。単純な《嬉しい》、とも少し違う。

俺は本心から風間に関わってほしくないと思っ
ているし、また本心から風間の手助けを喜んで
いる。

生憎、俺のセンスではこの複雑な感覚を言葉にする事は出来なさ
そう
だ。

彼女の言う通り、俺が止めても自分で勝手に調べ出すだろう。

こつなつた風間は俺がどつこつ言ったところでもどつなるものではない事は知っている。

「…だったら」

俺の言つべき事は一つだ。

『だったら？』

オウム返しに応える風間。

「一つだけ約束しろ」

自称高校生探偵の力は必要だ。風間の情報収集能力は侮れない物がある。

「一人で何かをしようとするな」

だけど、こいつは…風間は女の子だ。単純な暴力で簡単に壊れてしまう。

「行動するときは二人一緒だ」

二人でいれば、相手は迂闊に襲いかかってはこれない。

『うん、約束する』

それでも、何かあったらその時は。

「オレと一緒にいる限り、お前には怪我一つさせねえ。絶対だ。絶対だ。絶対だ。」

対にお前だけは守りぬく。だから、無理だけはするなよ」

そう、絶対に。

『…っんっ』

風間の強く、明るい返事。

こうして、即席の捜査チームが誕生した。

そして、翌日

六月十九日 午後零時四十分 平坂高校 3 - A 教室

「お待たせ。先輩」

「だから気配を消して後ろに立つのは止めるって。普通にビビるか
ら」

突然、背後から声をかけてきた黒川に文句を言う。無駄なのは分かっている。分かっているもやらなければならぬ時と言うのが男にはあるのだ。今がその時なのかどうかは分からないが。

「怪我、大丈夫か？」

黒川の包帯を左腕に巻いた姿が嫌でも目に入る。

手首から肩口にかけて乱暴に巻きつけられ、非常に痛々しい。

「うん。まあ、ね」

目を伏せ、答える黒川。明らかに大丈夫そうではない。

「そんな乱暴に包帯巻いて。不器用なのか？巻きなおしてやるよ」

「やめてっ」

手を伸ばすが、ひっこめられてしまう。

「下手に包帯…いや、呪符をいじれば僕の左腕の《アイツ》の封印が解かれてしまうんだ。天海先輩には悪いけど、君を僕の運命に巻

き込むわけにはいかない」

「よし、じゃあ行くか」

「ああんっ。無視しないでよー」

意外と大丈夫そうだった。俺の周りの女子は神経がチタン合金が何かで出来ているんじゃないだろうか。

ちなみに、もう一人のチタン合金神経系女子の風間は授業の後片付けの手伝いで職員室に行っている。

さすがに校舎内で何か起きる事はないと思い、俺は付いて行かなかった。

彼女が教室を離れている間に、《ある用事》を済ませてしまおうと思っただからだ。

「やかましいわ。こんな事やってたら昼休みが終わっちゃうだろ。

A組は隣だ。早く行くぞ」

「うん。僕を助けてくれた睦先輩…だったよね？お礼を言わないとね。ちゃんとタオルも持ってきたんだよ」

用事、それは睦さんへのお礼。

黒川には昨日のうちにメールで新品のタオルを持ってくるように伝えてあった。

さすがにあれだけ大量の血を吸ったタオルを返すことはできない。

「僕のお気に入りの柄のタオルなんだ。保存用に取っていたコレを手放すのは惜しいけど、命の恩人だから…」

黒川が鞆から透明なビニールに包まれたタオルを取り出す。

「ちらり、と大鎌を持った髑髏の死神が見える。」

何を渡そうとしているんだお前は。

「そうか。こんな事もあるつかと無地のふわふわタオルを持ってきていて良かった」

異様に禍々しいデザインの布切れを黒川の鞆に押し戻しながら言

う。

「どうして！こんなにカッコいいのに。絶対に喜ぶよっ？」

「そんなエグいモノを喜ぶ女子高生は日本中探してもお前くらいしかいねえよっ！」

「フフフ。それが天海先輩の限界なんだよ。世の中広くてね。意外とそう言うのが好きな女の子はたくさんいるんだよ？」

「マジかよ…。ってそんな事はどうでもいいだって。早く睦さんのトコに」

そう言いながら教室の出口を指差そうとした瞬間、俺の動きが止まった。

目の前に、女の顔が迫っていたからだ。

「ケージ！ニュースよニュース！」

顔の正体は風間。俺達が間抜けなコントをしている間に教室に戻ってきていたようだ。

ただでさえ無駄にテンションが高いと言うのに、今の彼女は通常より四割増し。限界突破寸前だった。

「とりあえず落ち着け」

俺の鞆から取り出した新品のタオルで軽く頭をはたく。

「どうしたって言うんだよ？」

「ニュースなのよ！ニュース！分かったのよっ。植木鉢事件の《目撃者》が！」

「おい…」

黒川の目の前で言う言葉じゃないだろう。

そんな話をこんな所でしたら黒川が傷つく

「本当？天海先輩を狙った犯人は許せないからね。僕も話を聞いておきたいよ」

どこるか目を輝かせていた。

「でしょ？黒川ちゃんも興味あるわよね。植木鉢事件の目撃者、それは意外な人なのよっ！」

「意外な、人？」

つまり、俺が知っている人物と言う事だろうか。

「職員室の帰りで会った友達が言ってたの。『目撃者の子が職員室に呼び出されて話を聞かれてるのを見た』って」

もったいぶり、中々目撃者の名前を言おうとしない風間。

何か重大な事を言う時に結論をなかなか言わないのは彼女の悪い癖だと思う。

「うやむやにすると思ってたけど、学校もちゃんと対応してるのね。驚いたわ」

「いいから早く言えって。昼休み中にA組に行きたいんだよ。睦さんにタオルを渡さなきゃならないんだから」

手に持ったタオルをひらひらさせながらばやく。

捜査も大事ではあるが、友人の命の恩人への礼を後回しには出来ない。

「あ、睦さんのところに行くのね？ちょうど良かったわ」

「ちょうど、良い？」

「えっ、もしかして…」

「そう、そのもしかしてなの！」

手に汗が滲む。まさか、そんな偶然が。

「目撃者はA組の睦さん。彼女が植木鉢を落とした犯人を目撃したって話なのよっ！」

風間が出した名前は俺達の予想通りであると同時に、あまりにも想定外のもの。

あまりのテンションの高さに周囲のクラスメイトが怪訝な瞳でこちらを見ているが、もはやそんな事は気にならない。

運命が俺達に、犯人を捕らえろと味方してくれている。
そんな気さえした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5490z/>

CAGE - 籠の中の記憶探偵 - 《事件編》

2012年1月11日06時56分発行